

韓国・心の旅

久しぶりに今年（一九九八年）七月、韓国を訪れた。韓国の読書運動に関する調査が目的であったが、そのついでに今まで足便が悪く久しく行きそびれていたいくつかの場所、旧跡を見学した。旧知の韓国放送通信大学元教授の鄭炳浣^{チョン・ビョングン}先生の四輪駆動車のお世話になり、三泊四日で韓国をほぼ一周するという強行軍の旅であった。

今、韓国は日本と同じく厳しい経済不況下にあり、耳にするのは倒産や失業や自殺といった暗いニュースが多かったのであるが、私の回った観光地は夏休みということもあっていつもと変わらず多くの家族連れでにぎわっていた。今回の旅は幸いずつと天候に恵まれ、しばしソウルの喧騒とあわただしさを離れ、のどかな田舎の景色をたっぷり堪能できたし、それ以上に韓国の高麗、李朝（朝鮮王朝）時代の古い歴史、文化、宗教の精髓に触れることのできた非常に楽しく、有意義な旅であった。また久しく心の中で思いついていた詩人尹東柱に深い関係のある河東の地を訪ねるという宿願を果たせた旅ともなった。

まず旅はソウルを振り出しに、初日は京畿道安城郡にある鄭

宇治郷 毅

国立国会図書館逐次刊行物部長

（68年同志社大学大学院法学研究科修士課程修了）

先生のご自宅に一泊させていただいた。近くにあるカトリックの修道院を見学。ここは美山里という名前からして美しい所であったが、天主教ミリネ聖地と呼ばれて韓国のカトリック信者の聖地になっていて、年中信者が絶えないとのこと。ここには一九世紀中頃朝鮮で最初に神父となり殉教した金大建という人の墓があり、私は墓と教会堂を見学した。この会堂には、殉教を強調するためか、李朝時代の様々な刑罰を受ける等身大の人の形がたくさん展示しており、少し奇異に感じられたが、迫害と差別の中で成長してきた韓国キリスト教の精神的表現かとも思われ、印象的であった。

二日目は、湖南高速国道を南下、忠清南道、全羅北道を通り過ぎ、全羅南道の智異山国立公園内にある古刹華嚴寺を見物。

この寺は六世紀新羅時代の創建だが、韓国の多くの寺院仏閣や文化財が一六世紀末の壬辰倭乱（日本では文禄・慶長の役）で豊臣秀吉軍に焼き払われたり、略奪されたが、この寺もご多分にもれず焼失、一七世紀始めに再建された。しかし国宝指定の建物も多くあり、特に私が感銘をうけたのは、この寺は韓国の



南海島観音浦より後方光陽湾（慶長の役最後の海戦の場）を望む。写真は筆者

他の寺院のような原色で塗り飾ったけばけばしさが全然なく、燦し銀のような深い落ち着きをたたえている点であった。深山の中でもあり、心を洗われる思いであった。次に韓国一の清流と言われるソムジン江の景色を楽しみながらひたすら南下、慶尚南道に入り、南部海岸地方に到達。この辺りは、日本の瀬戸内海に似て大小の島々が連なり、閑麗海上国立公園にも指定されているほど風光明媚な地帯である。ここで私は、この旅でぜひ訪れたいと思っていた目的地の一つである韓国第三の大島である南海島に渡る。この辺りは日本人観光客はほとんど足を踏み入れない所であるが、私は長年朝鮮史の研究をする中で心に棘のように引っかかっていた壬辰倭乱の最後の決戦の舞台となったこの島をぜひ自分の目で確かめたかったのだ。この前後七年にわたり十五万余の秀吉軍が朝鮮半島の隅々まで蹂躪し尽くした戦争の最後の年がちょうど今から四〇〇年前の一五九八年で、この年敗色濃い日本軍の前に立ちほだったのが名将李舜臣率いる朝鮮水軍であった。この島と半島には今では全長六六〇メートルの美しい南海大橋が架かっているが、この狭い露梁海峡をはさんで、退却する小西行長軍の救出に向かう日本水軍と朝鮮水軍が最後の海戦をくりひろげ、李舜臣將軍が殉死したのもこの辺りの海であった。私は深い怨念を朝鮮民族の中に残したこのむなししい戦争に想いを馳せながら、しばし眼前にひろがる紺碧の海と緑陰濃い島々に目をうばわれたのであった。ただ往時を偲べるものとして、將軍を顕彰する忠烈祠がこの島の丘に静かに建っていた。この日は、河東の町に近く、大きな川幅となって流れるソムジン江の河口岸に建つ鄭先生の故郷の実

家に一泊させていただいた。夜、川岸に設けた縁台で涼みながら、この地方が日本植民地時代よりウナギと海苔と貝の名産地であったこと、今はかなりの海が埋め立てられそれらがあまり採れなくなったこと、また光陽製鉄という大製鉄所もでき公害問題も起こっているという話を聞き、現在の韓国の激しい変化を再認識させられた。

三日目は、朝鮮の有名な古典『春香伝』の舞台となった全羅北道南原の名所広寒楼を見学後、オリンピック高速国道を大邱へ向かい、途中韓国仏教の中心地である伽耶山国立公園の海印寺を見学。ここは数年前世界文化遺産の指定を受けた所。あまりの深山溪谷の中にあつたため、秀吉軍の毒牙を避けえた数少ない寺ということで、ホッとしながら広大な境内を参観した。ここが有名なのは十三世紀の高麗時代、十五年の歳月をかけて彫刻し、七百年間ほぼ完全な形で維持されてきた八万枚の木版、いわゆる「八万大蔵経版」(国宝)を有するからである。これは技術的、芸術的価値も高く、朝鮮仏教の粋が結集したもので、韓国が現在世界に誇れるものの一つであろう。経蔵の格子越しに瞥見するだけでも肅然と襟を正さしめるものがあつた。次に大邱を経て、慶尚北道の安東を目指し、河回民俗村(ハーヘマウル)に入る。これも念願の地であつたが、河に抱きかかえられるように李朝時代の村がそのまま残り、多くの素晴らしい韓式の旧家が現存し、何か三、四百年前にタイムスリップしたような不思議な気持ちにさせられた。朝鮮の古い歴史に思いを馳せながら散策、民宿に一泊した。

四日目、安東の郊外の清涼山道立公園内の陶山書院を見学。

この書院(李朝時代地方の儒学者などによって経営された私塾)は、安東湖という非常に美しい湖の岸辺に人里遠くポツンとあり、十六世紀後半以後建築され続けた十数棟の瓦葺き韓屋が整然と軒を接していた。ここは李朝を代表する文臣・儒学者であり、詩人、教育家としても有名な李退溪(現在の韓国の千ウオン札の肖像になっている)の死後、門人によって設立されたという。李退溪は朝鮮の朱子学の大成者として、李朝の思想的拠り所となつたのみでなく、日本の林羅山や山崎闇斎らにも大きな影響を与えた人。生前も多くの青年が朝鮮全土から、彼の学問と清廉潔白な人柄を慕ってこの僻地を訪れたという。私は、今でも韓国の人々の精神的支柱となっている儒教の聖地に佇み、時と場所を超える教育の偉大な意味を思わざるをえなかつた。帰路につき、半島を横断してソウルを目指す。途中、慶尚北道から忠清北道にかけてまたがる正陰の地であつた千メートル級の険しい鳥嶺山脈を越える。ここ聞慶には昔の関所跡「聞慶関門」があり、見学。文禄・慶長の役の時、小西行長と加藤清正が先陣争いをした峠で、朝鮮側の作戦ミスで軽々と突破された旨が正直に書かれた記念碑が立っているのが興味深かつた。夜遅く安城に到着、休憩した後、ソウルのホテルに帰館。短いながら、密度の濃い旅を終えた。

最後になつたが、一九九五年二月同志社の今出川キャンパスにその詩碑が建立された韓国の有名な詩人尹東柱(ユン・ドンジュ)とこの旅の関連について述べておきたい。尹東柱は一九四二年一〇月同志社大学文学部に入学し、一九四三年七月ハングル(朝鮮語)で詩を書いたことが朝鮮独立運動につながると



植民地期、尹東柱詩集原稿が秘匿されていた鄭氏旧家。

いう理由で京都下鴨署に逮捕され、一九四五年二月満二十七歳の若さで福岡刑務所で獄死した人である。彼はソウルの延禧専門学校（現在の延世大学）に在学中、『空と風と星と詩』と題した詩集を刊行しようとするが、植民地期のことそのハングル詩集の出版を果たせず、三部の肉筆詩稿を作成した。渡日に際し、

一部は自分が持ち、一部を恩師に献じ、残る一部を親友鄭炳昱に献じた。結局、前の二部は官憲に没収されるなどして失われ、友人がもっていた一冊だけが解放後陽の目を見て、同名の詩集として出版され一躍この詩人の名が世に知られることになった。しかもこの最後に残った遺稿は、植民地期の厳しい監視の中で、友人の故郷河東の実家の床の下に隠すに入れられ秘匿され、この友人により解放後世に送り出されたという経緯がある。

実は今回私の旅を案内してくれた鄭炳浣先生こそ、詩人の親友鄭炳昱（元ソウル大学教授）先生の実弟であり、わざわざ私を詩集遺稿が秘匿されていた河東の現存する実家（写真参照）に招待し、宿泊の便宜を提供して下さったのである。私は不思議な興奮を覚え、真夜中に目が覚め、この薄命の詩人の運命に思いを馳せた。遺稿に宿った詩人の美しい魂は、どのような思いをもつてあの冬の時代を耐え忍んだのであろうかと。またどのような春を待ち望んだのであろうかと。この時私は、詩人の有名な詩「星かぞえる夜」の一節を思い出し、ほろ苦い味をかみしめた。

しかし冬が過ぎわたしの星にも春がくれば
墓の上に真つ青な芝草が萌え出るように
わたしの名前が埋められた丘の上にも
誇らしく草が生い茂るでしょう

（『星うたう詩人尹東柱の詩と研究』）

尹東柱詩碑建立委員会編 三五館刊）

今回の韓国の旅は、長く心に残る旅となった。